

平成 22 年度（第 54 回）
岩手県教育研究発表会資料

国語

中学校国語科における知識・技能の活用を 図ることをねらいとした問題の作成

平成 23 年 2 月 18 日
岩手県立総合教育センター
長期研修生
所属校 盛岡市立黒石野中学校
渡 邊 康 二

目 次

I	研究目的	1
II	研究の方向性	1
III	研究の内容と方法	1
IV	研究結果の分析と考察	1
1	「活用問題」の作成に関する基本的な考え方	1
(1)	本県における基礎・基本の定着について	1
(2)	「活用問題」とは	2
(3)	「活用問題」を作成する意義	2
2	中学校国語科における「活用問題」の作成に関する基本的な考え方	2
(1)	中学校国語科における「活用」のとらえ	2
(2)	中学校国語科における「活用問題」とは	3
(3)	中学校国語科における「活用問題」を作成する意義	3
3	中学校国語科における「活用問題」の作成	4
(1)	中学校国語科における「活用問題」の構成と作成上の留意点	4
(2)	中学校国語科における「活用問題」の利用に当たって	7
4	中学校国語科における「活用問題」の作成に関するまとめ	7
V	研究のまとめ	8

<おわりに>

【引用文献】

【参考文献】

I 研究目的

本県の義務教育では、「全ての児童生徒一人一人に基礎・基本の定着を実現していく」ことを目標としており、基礎・基本の定着については、論理的に物事を思考したり、表現したりすることなど、基礎的・基本的な知識や技能の習得に留まるものではないことを確認している。

この目標の実現のためには、基礎的・基本的な知識・技能の活用を図る学習活動を意識した授業展開を行い、授業や家庭学習においても論理的に物事を思考したり、判断したりすることをねらいとした問題に意図的に取り組ませていくことが必要である。

この研究は、中学校国語科における基礎的・基本的な知識・技能の活用を図ることをねらいとした問題（以下「活用問題」と表記）を作成し、提示することを通して、生徒への基礎・基本の定着を支援しようとするものである。

II 研究の方向性

授業や家庭学習などで、基礎的・基本的な知識・技能を活用することにさらに習熟を図るため、中学校国語科における「活用問題」を作成する。

III 研究の内容と方法

- 1 「活用問題」の作成に関する基本的な考え方（文献法）
- 2 中学校国語科における「活用問題」の作成に関する基本的な考え方（文献法）
- 3 中学校国語科における「活用問題」の作成（文献法）
- 4 中学校国語科における「活用問題」の作成に関するまとめ

IV 研究結果の分析と考察

1 「活用問題」の作成に関する基本的な考え方

(1) 本県における基礎・基本の定着について

本県の義務教育の学力向上の目標は、「全ての児童生徒一人一人に基礎・基本の定着を実現していく」ことである。

基礎・基本の定着とは、単に読み・書き・計算といった学習基盤や各教科における基礎的・基本的な知識や技能の習得に留まるものではなく、論理的に物事を思考したり、適切に判断したり、表現したりするなど習得した知識や技能を活用させることを通して、基礎・基本を身に付けさせることである。

平成20年度には岩手県教育委員会が「『活用』に関する指導資料」を作成し、平成21年度には岩手県立総合教育センターで「知識・技能の活用を図る学習活動に関する指導展開例の作成」と題して研究成果をまとめ、本県の教育課題である「活用」に関する指導の方向性を示した。

その中で、「活用」を意識した授業とは、知識・技能を活用することが目的ではなく、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、それらを活用する学習活動を手立てとして、思考力、判断力、表現力等を育成することを目的とした授業であり、基礎・基本の定着を実現するためには、知識・技能の活用を図る学習活動を意図的に位置付けた単元構想に基づいた授業実践が求められていることが示された。

(2) 「活用問題」とは

「活用問題」とは、学習指導要領を基に、知識・技能を活用して、思考力、判断力、表現力等を育むことを目的とした問題である。

そのために、「活用問題」は、必要な情報を取り出したり、根拠をもって考えたり、自分の考えを説明したりするなどの言語活動に取り組めるよう構成している。

(3) 「活用問題」を作成する意義

「活用問題」は、「『活用』に関する指導資料」（岩手県教育委員会，2008）や「知識・技能の活用を図る学習活動に関する指導展開例」（岩手県立総合教育センター，2009）で示された「活用」を意識した授業を展開しながら、知識・技能の活用への習熟を図るために利用することを想定している。

生徒は、授業や家庭学習などで「活用問題」に繰り返し取り組み、様々な形式の問題を解くことを通して、知識・技能を活用することに習熟していく。また問題の「正答例と解説」を通して、知識・技能を活用する手立てを確認したり、活用したりすることで確かな習得がなされる。

また教師は、生徒の解答状況から、それまでの授業について「習得・活用・探究」の学習活動のバランスはどうであったか、言語活動をどのように授業に位置付けてきたかといった視点で授業実践を振り返ることによって、授業改善につなげることができる。

これらのことから「活用問題」への取組を通して、生徒への「基礎・基本」の定着を支援することができるものであり、「活用問題」を作成することは意義があると考えられる。

2 中学校国語科における「活用問題」の作成に関する基本的な考え方

(1) 中学校国語科における「活用」のとらえ

中学校国語科では、既習の基礎的・基本的な知識・技能や、これまでの生活経験の中で身に付けた知識・技能を用いながら言語活動を行うことを「活用」を意識した学習活動ととらえる。

学習指導要領では、各領域の指導事項を「言語活動を通して指導するもの」とし、学習指導要領解説国語科改訂の要点「(3) 言語活動の充実」には、次の【資料1】のように示されている。

【資料1】学習指導要領解説国語科改訂の要点「(3) 言語活動の充実」

「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、内容の(2)の社会生活に必要とされる発表、案内、報告、編集、鑑賞、批評などの言語活動を具体的に例示している。

ここにあるように、学習指導要領では、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことのそれぞれの領域の中で、各学年に二つから三つの言語活動例を示している。この言語活動を行うことで、各領域の基礎的・基本的な知識・技能を活用し、それらの確かな習得につなげ、思考力・判断力・表現力等を育むことを目的としている。

また、「知識・技能の活用を図る学習活動に関する指導展開例」（岩手県立総合教育センター，2009）では、既習内容を使いながら自分の考えをまとめ表現する学習活動や、物事を関連づけたリ、整理したりしながら課題に取り組む学習活動等を、「活用」を意識した学習活動ととらえ、授業展開例としてまとめている。

(2) 中学校国語科における「活用問題」とは

中学校国語科における「活用問題」とは、学習指導要領の言語活動例を生徒の体験する日常生活や学校生活場面に設定して、その場面で行われる言語活動を問題の形式としたものである。問題は、情報の取り出し、解釈、そして、記録、要約、説明、論述といった言語活動を段階的に行わせる構成になっている。

【資料2】は、学習指導要領〔A 話すこと・聞くこと〕の言語活動例であり、【資料3】は【資料2】の言語活動例をもとにした「活用問題」の問題文である。この言語活動を通して、〔A 話すこと・聞くこと〕のそれぞれの指導事項を指導するものである。

【資料2】学習指導要領〔A 話すこと・聞くこと〕 第1学年 言語活動例

ア 日常生活の中の話題について報告や紹介をしたり、それらを聞いて質問や助言をしたりすること。

【資料3】「活用問題」中学校1年国語 問題1〔中学生になって〕

自分の出身小学校へ中学校の様子を紹介に行くことになりました。次の会話文は、その時の内容について考えているときの様子です。また、資料は学校のパンフレットです。それぞれを見て、あとの各問いに答えなさい。

このように、「日常生活の中の話題について報告や紹介」する場面を、「出身小学校へ中学校の様子を紹介に行く」と設定した。その場面について〔A話すこと・聞くこと〕の指導事項にそって、情報の取り出し、取り出した情報の解釈、そして、説明という言語活動を行わせることができるように、問題の形式としたものが「活用問題」となっている。

(3) 中学校国語科における「活用問題」を作成する意義

ア 「活用」を意識した学習活動との関わりから

「活用問題」は、学習指導要領言語活動例を基にしている。そのため、「活用問題」は、言語活動を中心とした「活用」を意識した学習活動を展開する場合に利用できる。

「活用問題」は、情報の取り出し、取り出した情報の解釈、そして、記録、要約、説明、論述といった言語活動が中心となっている。また、教科書教材とは異なる初見の文章を問題文に多く使用し、生徒が場面を想像しやすい日常生活や学校生活の中で行われる言語活動を問題場面に設定している。そのため、日常生活と関連させた言語活動を行わせるときの演習問題として利用することができる。

このように、「活用」を意識した学習活動に利用できる「活用問題」を作成することは、意義があると考えられる。

イ 本県の平成22年度全国学力・学習状況調査〔国語B:主として活用〕の結果から

「平成22年度全国学力・学習状況調査 設問別調査結果〔国語B:主として活用〕岩手県一生徒（公立）」、及び「平成22年度全国学力・学習状況調査 設問別調査結果〔国語B:主として活用〕4 教科に関する調査の各問題の分析結果と課題」（国立教育政策研究所、2010）によると、記述式の問題において次のような課題が見られる。

記述式の問題の分析結果によると、岩手県は、全国の正答率に比べ大きな落ち込みが見られるわけではないが、設問3三については、無解答率は22.6%と高い数値を示している。

設問3三（【資料4】）は、文章の表現意図をとらえ、文章の特徴的な表現を取り上げること

や、その働きや役割を考えるとといった、文章をクリティカルにとらえる問題になっている。

【資料4】平成22年全国学力・学習状況調査国語B ③三

山田さんと中川さんは、この文章でおもしろいと感じた点について話し合っています。次は、二人が【注目した表現】と【話し合いの一部】です。【話し合いの一部】で山田さんは、「③と④には、共通した面白さがあるよね。」と発言しています。あなたは、③と④には、どのような共通した面白さがあると考えますか。あなたの考えを、「【注目した表現】③と【注目した表現】④には、」に続けて、三十字以上、五十字以内で書きなさい。

無解答率が高いのは、生徒がこのような問題に慣れていないことと、「自分がそう考えたのはなぜか」「それはどこからわかるか」「自分だったらどのように考えるか」といった、自分の考えを具体的に説明することに慣れていないことに起因すると考えられる。

以上の状況をふまえると、根拠をもって自分の考えを説明、論述する問題を中心に作成した「活用問題」に、授業や家庭学習で意図的・計画的に取り組ませることは、本県生徒の課題を解決することにつながると考える。

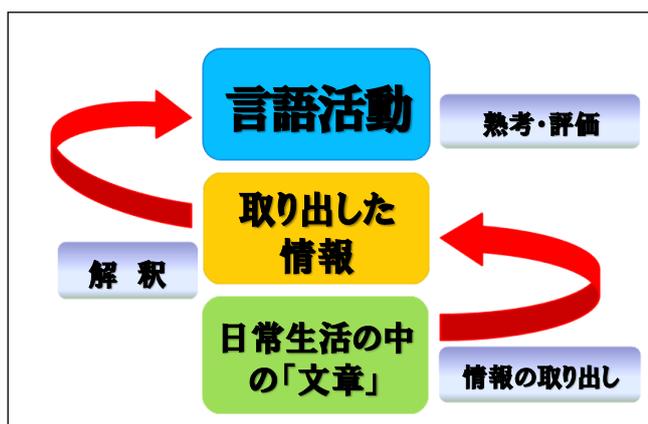
3 中学校国語科における「活用問題」の作成

(1) 中学校国語科における「活用問題」の構成と作成上の留意点

ア 「活用問題」の構成

「活用問題」は、二つから三つの小問で構成されている。それぞれの小問は、学習指導要領言語活動例に則した言語活動を行う中心問題と、中心問題を解くためのステップ問題で構成されている。

中心問題は、主に記述式の問題となっており、取り出した情報やその情報から解釈した内容を基に、根拠をもって自分の考えを説明、論述させる問題



【図1】言語活動を行うための思考の流れ

になっている。ステップ問題は、情報の取り出しや内容の解釈など中心問題の言語活動を行うための手立てが示されている。このように、二つから三つの小問が、言語活動を行うための思考の流れを促すような配列になっている。

また、それぞれの小問を授業の単位時間に単独で利用することもできる。それぞれの小問には、学習指導要領各領域の指導事項に対応したねらいをもたせており、授業で扱った指導事項の確認として、この小問を利用することも可能である。

イ 「活用問題」作成上の留意点

「活用問題」を作成するにあたり、問題文は、文章教材に限らずグラフや図表など多様なテキストを用いた。また、各問題に複数のテキストを掲載し、それぞれのテキストを関連させて問題に取り組ませるようにした。

「読解力向上に関する指導資料－PISA 調査(読解力)の結果分析と改善の方向－」(文部科学省、2005)には、読解力の向上に関する指針として「指導のねらい」とする七つの視点が示された。その一つとして「ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること (ア)多様なテキストに対応した読む能力の育成」が示されている。

全国学力・学習状況調査の出題も、文章教材に限らず、新聞記事やパンフレット、グラフなどの統計資料や図表など、多様なテキストを用いた問題となっている。

「活用問題」も、文章教材だけでなく、新聞資料や学級通信、グラフ、写真やイラストなどをテキストとして使用した。そして、それらの資料の一部を見て答えられる問題ではなく、複数の資料を関連させることによって、また、文章全体を大づかみしてとらえることで答えられるような問題とした。そのため、一問一答式のような考え方ではなく、それまでの学習の中で習得した、各領域の基礎的・基本的な知識・技能を活用して、時には領域をまたがった基礎的・基本的な知識・技能を活用して言語活動を行うことができると考える。

【資料5】【資料6】は、「活用問題」の構成、配列、テキストの具体例である。

【資料5】「活用問題」の具体例（構成・配列）

1年〔読むこと〕 ブックトーク		<p>問一 次の表は、二つの作品のそれぞれの場面についてまとめたものです。それぞれの作品の中から、適当な言葉を指定の字数にあわせて抜き出し、空らんを埋めなさい。</p> <table border="1"> <tr> <td>「トロッコ」 芥川龍之介</td> <td>「ゼロ弾きのゴーシュ」 宮沢賢治</td> </tr> </table>		「トロッコ」 芥川龍之介	「ゼロ弾きのゴーシュ」 宮沢賢治
「トロッコ」 芥川龍之介	「ゼロ弾きのゴーシュ」 宮沢賢治				
「トロッコ」	「ゼロ弾きのゴーシュ」	<p>良平は、念願のトロッコに乗ることができたが、気がつくまで来たこともない、遠くまで来てしまっていた。ここから一人で歩いて帰らなければならぬことがわかった。(① 八字)</p> <p>良平は無我夢中で走り出した。懐の菓子も、板草履すら投げ捨ててひたすら走った。(② 一字)は無理に我慢しても、鼻だけはくうくうなっていた。</p>	<p>楽団の団長に、「曲の(① 二字)ができていない」と、どなかへ行ってしまおう。一人残されたゴーシュは、セロを抱え、壁の方を向きながら、(② 五字)ぼろぼろ涙をこぼして、もう一度練習を始めた。</p>		
<p>問二 次の会話は、ブックトークの中で出された二つの作品についての会話です。二つの作品についての会話として、適当でないものを次から一つ選び記号で答えなさい。</p> <ol style="list-style-type: none"> 「トロッコ」の主人公があわてて家に向かって走っている様子が『板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまった』から伝わってくるよね。」 「そうだね。とにかく早く走ったんだね。早く帰って、自分が早く来たことを自慢したかったんだね。」 『ゼロ弾きのゴーシュ』のゴーシュは、悔しかったんだね。『壁の方を向きながら』なんて・・・。」 「周りのみんながいなくなってしまうても、一人黙々と練習するなんてよっぽど練習が上手だね。」 	<p>問三 それぞれの作品について一通り話し合った後、二つの作品を朗読することになりました。それぞれの文章のぼう線で囲まれた部分は、どのように朗読し(発声・強弱・声の調子等)、主人公のどのような気持ちを表現するのがふさわしいと思いますか。次の文の形に当てはめて答えなさい。</p> <p>() ※朗読の仕方 () 読むことで、主人公の () ※気持ち () 気持ちを表現する。</p>	<p>1 中心問題となっている言語活動を行うための手だてとして、1〜2問のステップ問題が配列されている。</p>			
<p>「トロッコ」 ()</p> <p>良平の ()</p> <p>「読むことで、 () 気持ちを表現する。</p>	<p>「ゼロ弾きのゴーシュ」 ()</p> <p>ゴーシュの ()</p> <p>「読むことで、 () 気持ちを表現する。</p>	<p>中心問題の具体例</p> <p>ステップ問題を基に、自分の考えを説明、論述させる問題。ここでは、「自分であればどのように朗読するか」を記述させている。</p>	<p>ステップ問題の具体例</p> <p>問題文から、情報の取り出しや内容の解釈を行う。</p>		

(2) 中学校国語科における「活用問題」の利用に当たって

中学校国語科「活用問題」は、次のような場面で利用することを想定している。

ア 単元のはじめでの利用

「活用問題」は領域ごとに配列されている。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれの領域の学習内容を考えるときに、どの言語活動を設定するかの参考にすることができる。また、「活用問題」を生徒に示すことで、単元の言語活動の見通しを持たせることや、その言語活動に対する習熟の度合いを測ることもできる。これにより、単元で重点的に指導すべき指導事項を見取り、学級の実態に即した単元の指導計画を立てることにつなげられる。

イ 単位時間の中での利用

「活用問題」は、3(1)アで述べたとおり、小問それぞれに学習指導要領指導事項に則したねらいが含まれている。これらを分割して行うことで、単位時間の中で扱った指導事項がどの程度習得されたかを見取ることができる。

ウ 単元のまとめとして利用

「活用問題」を用いて、言語活動を単元のまとめに設定することができる。ねらいとして単元に設定された言語活動に習熟させ、指導事項の習得のために用いることができる。

エ 家庭学習として利用

「活用問題」を家庭学習や週末課題で用いることができる。家庭学習で行われた「活用問題」に、「正答例と解説」とともに教師の解説を加えることで、指導事項の確実な習得を図ることができる。

4 中学校国語科における「活用問題」の作成に関するまとめ

中学校国語科における「活用問題」の作成について、以下のようにまとめる。

- ・中学校国語科「活用問題」を作成するに当たり、中学校各学年でそれぞれの基礎的・基本的な知識・技能が、どの程度習得されているべきかを明らかにすることができた。これにより、指導事項と言語活動の関係を明らかにすることにつながった。言語能力を育成するための言語活動を行うためには、学習指導要領指導事項の学習過程を踏まえる必要があり、小学校で行われる言語活動、高等学校で行われる言語活動との系統性をみる必要があることが分かった。
- ・言語活動を行わせるための思考の流れを整理することができた。言語能力を育成するための言語活動を行うには、情報を取り出し、取り出した情報を解釈し、自分の考えを持つ必要がある。中学校国語科「活用問題」は、この思考の流れに沿って意図的に問題を設定し、言語活動を行うための思考の流れに慣れさせることができる問題となった。「活用問題」のモニター調査では、「活用問題」の設問に沿って取り組むことで、記述式の言語活動にも抵抗なく取り組む生徒の姿が見られた。モニター調査から、言語活動に取り組ませるためには、そのための思考の流れに沿って取り組ませることが大切だということが分かった。
- ・中学校国語科「活用問題」は、学習指導要領の言語活動例 23 例を問題として具体化することができた。「活用問題」の問題文は、新聞記事やパンフレット、総合的な学習の時間の活動など日常生活を意識した。これにより、「活用問題」が教室の中だけのものではなく、他教科をはじめ、実生活で生きて働く国語の力をつけることが可能となった。
- ・「活用問題」を家庭学習で取り組ませることで、授業と家庭学習の関係を明らかにすることができた。言語活動が中心の「活用問題」に取り組ませるためには、教師が問題のねらいをつか

む必要があり、授業と関連させる必要がある。授業と関連させた家庭学習を行わせることで、生徒の思考力・表現力・判断力等を養うことにつながることで、問題の作成とモニター調査の様子から、さらに実感できた。

V 研究のまとめ

本研究の目的は、生徒への基礎・基本の定着を支援するために、言語活動を拠り所とし、情報を要約したり、考えを説明したり、論述したりすることを中心に構成した基礎的・基本的な知識・技能の活用を図ることをねらいとした問題を作成し、提示することであった。

研究を通して、中学校国語科における「活用」のとらえに沿って「活用問題」を作成することができた。

以下に、「活用問題」の利用によって得られる効果について述べ、研究のまとめとする。

○生徒が、授業や家庭学習などで「活用問題」に取り組むことにより、知識・技能を活用することに習熟し、思考力、判断力、表現力等が育成されること。

○教師が、生徒の「活用問題」への取組状況から、基礎的・基本的な知識・技能の習得状況や思考力、判断力、表現力等の育成状況を把握し、授業及び家庭学習等の改善及び支援を行うことができること。

〈おわりに〉

この研究を進めるに当たり、ご協力いただきました先生方、生徒の皆さんに心からお礼を申し上げます。

【引用文献】

- 文部科学省（2008），『中学校学習指導要領（平成20年3月）』 p.21
文部科学省（2008），『中学校学習指導要領（平成20年9月）解説－国語編－』 p.7
文部科学省（2010），『全国学力・学習状況調査 中学校3年 国語B』 p.中国B-13

【引用 web ページ】

- 国立教育政策研究所（2010），『平成22年度全国学力・学習状況調査 設問別調査結果〔国語B：主として活用〕岩手県－生徒（公立）』
http://www.nier.go.jp/10chousakekkahoukoku/todoufukun_chousakekka_shiryuu/03_iwate.htm
文部科学省（2005），『読解力向上に関する指導資料－PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向－』 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryoo/05122201/006.htm

【参考文献】

- 岩手県教育委員会（2008），『「活用」に関する指導資料』
岩手県立総合教育センター（2009），『知識・技能の活用の活用を図る学習活動に関する指導展開例の作成』
岩手大学教育学部附属小学校（2010），『未来を担う人間力をはぐくむ学びの創造 研究紀要』
岩手大学教育学部附属中学校（2010），『岩手大学教育学部附属中学校研究紀要』
岩間正則 編（2008），『文科省全国学力調査 中学校国語B問題を授業する－「活用」の力とはなにか－』 明治図書出版
岩間正則 編（2009），『文科省全国学力調査 中学校国語B問題対応の教材開発－知識・技能を活用する「記述式」の課題づくり－』 明治図書出版
高木展郎 編（2008），『各教科等における言語活動の充実－その方策と実践事例－』 教育開発研究所
第58回東北地区国語教育研究協議会（2010），『岩手大会 大会要項』
盛岡市教育研究所（2008），『国語科における知識や技能を活用する力を身に付けさせる学習指導法の研究』
盛岡市立緑が丘小学校（2010），『自己の学びを創る子どもを育てる 研究実践記録集』

【参考 web ページ】

- 国立教育政策研究所（2010），『平成22年度全国学力・学習状況調査 設問別調査結果〔国語B：主として活用〕 4 教科に関する調査の各問題の分析結果と課題』
http://www.nier.go.jp/10chousakekkahoukoku/03chuu/chuu_4k.pdf